

地方の看護学校はつらいよ

檜山医師会
江差保健所 江差高等看護学院

岩田 顕

18歳人口が減ってきて、大学の中には定員を割り込んで苦しい経営のところもあると聞きます。その中で、少子化どこ吹く風と、全国的に看護系大学や看護系学部学科は凄まじい勢いで増えてきました。それだけ看護系に学生が集まりやすい、大学側からすると魅力的だということだと思います。

道内も気がつけば13の看護系大学があります。北海道はまだ3年課程の定員の方が大学より多い状況ですが、極端な形になっているのが青森県です。なんと青森県は6つも看護系大学が存在し、3年課程の数倍の定員があります。明らかに学生集めのために大学にシフトさせているのが分かります。函館や道南圏の高校生も狙われているということも聞きます。

北海道立江差高等看護学院は20年前の平成10年に開校した3年課程の看護学校です。前身は昭和33年からの道立江差病院附属准看護婦養成所でした。道内には多くの看護職養成校（大学から准看護師養成まで）がありますが、「市」ではなく「町」に存在するのは3校のみです。当別町の北海道医療大学、浦河町の浦河赤十字看護専門学校と、江差町のわが校だけです。わが校は、最も人口が少ない（線路もない）自治体に建っている看護学校ということになります。このようなことから、浦河の看護学校にはご迷惑かもしれませんが、勝手に心の友のような気がしています。

2040年に向けて、医療・介護分野での需要増に見合った就業者数が必要となります。働く世代は減少していきますので、人手不足はこれまで以上に大変なことになるといわれています。そういう意味では看護職養成学校の存在はまさしく「正解」です。

そして、看護師養成とは別の観点での田舎の苦しい事情があります。地方の町には、高校を卒業した後に行く学校がありません。数少ない地元の就職以外は、進学でも就職でも大抵都市部に出ていくわけです。その子らを何とか引き止める、または他から若い子を連れてくる地方創生的発想の別のミッションも存在します。

平成10年に開校して数年間の学生確保は順調でしたが、その後は学生確保困難時代にどっぷりと浸かってしまっています。背景として、地方での子どもの減り方が「半端ない」ことがあります。

わが校は正直言って、看護大学や他の看護学校の滑り止めの位置付けにあります。そのため、多く

の子は他の学校に合格するとそちらに流れます。結果的に残った入学生の基礎学力はお世辞にも高いとはいえません。

また、親や先生に勧められて、自らは強い動機を持たないで入学してくる子も一定程度います。確かに、今の時代に、安定していてどこに住んでも困らない職業ということで、親の期待も大きいようです。この中には、経済的に困窮している家庭の子が結構含まれます。それらの家庭では、自治体や医療機関の修学資金が大きな動機になっている現状があります。しかし修学資金は、万が一退学した場合、そのまま借金となって、その後の生活を圧迫する両刃の剣です。

入学してからの学業不振、モチベーションが続かないことも相まって、留年や退学する学生は想像していたよりもずっと多いのです。

9割以上が合格する国家試験も、わが校の学生たちにとっては高いハードルです。こちらに来た当初の結果は惨憺たるものでした。そこで、次の年から一念発起（私が発起してどうするんだという思いはありますが）し、特別講義をやることにしました。解剖生理や公衆衛生的な問題などは勉強すれば私でも対処できます。そして、今年は、削除になった不適切問題に救われ、たまたま不合格者を出さずにすみました。

これから2月に向けて、また学生の尻を叩く国試対策を始めます。気分だけ「ドラゴン桜」です。

